「竹内芳郎の暴力論、ならびに「市民的共同体」ヴィジョンを改めて引き継ぐ意義をめぐって――斎藤幸平の、〈マルクスにおける「脱成長のコミュニズム」復権論〉にも関わらせて」

問題提起者：清 眞人さん

日時：2025 年 3 月 23 日（日）13:30～16:30

参加費：無料

方式：対面とオンラインの同時開催

会場：しらゆり会議室（新宿駅新南口の新南改札から徒歩 1 分）

参加者：11 名

問題提起要旨：

最近、斎藤幸平の試みが大きな注目を集めている。すなわち、晩期マルクスの中に、《「エコロジカルな社会主義」思想の蘇生とその更なる開花、かつまたそれを「個人的所有の再建」という目標と結合しようとした思索》、それを鋭く取り出そうとした試みが。私は、この彼の試みに敬意を表す。

と、同時に指摘したくなる。竹内芳郎は、今から約 39 年前に『具体的経験の哲学』（1986 年）の中で、「工業化のもたらすほとんど致命的な欠陥」として地球環境の危機的破壊が工業化によってもたらされている現状を早くも指摘し、この事態を前にして、旧来の「マルクス主義」が採る「生産力主義」は「マルクス主義からその魅力の大半を急速に奪ってしまった最大の元凶のひとつ」となったと、それを断罪していたことを。

そして、竹内の思索的苦闘の歴史を研究してきた者として、更に次のことを指摘したい。竹内の思索の苦闘史（何よりも、真の「自由・平等・友愛」の社会の実現を追求していたはずのマルクス主義が何故自ら己の理念を致命的に破綻せしめる「独裁主義的・権力専横/追随の階層社会」しかもたらすことができず、結果として自己破綻に陥ったのは何故か？ その原因の徹底解明を追求せんとする）において巨大な席を占めるもの、それは、一言でいえば「暴力論」である、と。また私は次の彼の主張にも共感する。――人間社会が暴力の放つ呪縛の罠から

抜け出せる唯一の脱出路は、農村社会に起源を持つ「共同体」意識が「市民社会」的リベラリズムと深く複合されることであり、そうしてこそ、人類は己を偏狭な民族主義の罠に陥らせることなく、己を神格化する民族が常に纏おうとする排外主義の垣根を超えて、「自然権」的普遍性の地盤に咲く「相互性のヒューマニズム」によって己を世界市民的共同体へと成長させようと努め始めるのだ、という主張に。

ところで斎藤に戻れば、彼はもっぱら「脱成長のコミュニズム」論に集中していて、上述の竹内のテーマは彼において登場することはない。

他方、竹内には両方がある。その彼の思索の幅それ自体を、我々は学びの糧とすべきではなかろうか？！